

平成三十年八月 青葉会報

一 今回は川口選者以下9名出席。旅行中のゆたかささんから11名投句。毎度お願いしている進行役は猛さん。御覧のように夏バテで投句された天牛さん、亜也さん、孤舟さん、弘子さんが好成績でした。

亜也さん寄贈の大吟醸「手取川」（加賀の白山）、千恵さんの純吟「蓬萊」（飛騨高山）、小生からラム酒「TAN DU AY」（マニラの坪井憲さんから）とドライマンゴー（全）、豆源の「おとぼけ豆」、新潟の「うるめ佃煮」、いつも忠彦さん手配のつまみを賞味しつつ、「俳句あるふあ」夏号と眞希子さんからの選句FAXを回覧。話題は社友会ビアパーティ及び五郎太さんのギリシヤ旅行など、そして弘子さんから10月から句会が夜から昼に変わることににつき、高齢化進行で公共施設の昼会議室利用が増え、どこでも取り合いで抽籤になつてゐる由。

二 関係者近詠

夏大根二子を育てし家業閉づ

眞希子

朝涼に思はず空を仰ぎけり

規雄

借店舗五十年守り燕の巢

全

「NHK俳句」9月号

星野高士選

木耳の弾力刻む長寿食

全

太棹の音色ひびける祭かな

允章

職人の休憩定刻夏の蝶

全

眼裏に花火描きて音を聞く

全

ハンカチのたたまれしまま安息日

全

その尻のしまりて小さき秋茄子

全

黒南風やヒマヤラ杉に知の重さ

弘子

羅の暖簾掛けある白き腕

全

喧騒と芒種の雀老い兆す

全

緑蔭にあり車椅子乳母車

恵洲

巢燕へ園児の声援声揃ふ

全

川向ふ夏祭らし遠太鼓

全

先生の胸まで駆けつこ柿若葉

全

句会今日苦界と化せる酷暑哉

全

溶接の火花が海へ埠頭朱夏

全

太郎の屋根次郎の屋根も大暑哉

全

ころもがへ純とつくものみな捨てにき

青史

大鉄会8月

わが心あやふし容赦なく蟻戮（ころ）す

全

何時からか馴染みとなりし庭蜥蜴

盛雄

アラガヘル抱接のとき哲学者

全

去る火星眼下に浪花の遠花火

全

昼寝覚め落ちてきさうなシャンデリア

全

風鈴やお伽の国へ誘ふ午後

健介

今だからこそ妻恋の詩アマリリス

全

進路なほ迷い過ぎ行く夏休み

全

芝居はね海老蔵談ずる夏座敷

紀久男

不思議なり瀧音消ゆる刻（とき）のあり

紀久男

老頭児（ロート）の新樹光浴び太極拳

全

気合入る音締（ねじ）め涼やかおさらひ会

全

「森の座」9月号

きさらぎ句会8月

三 芳賀徹の草田男好み

弘子さんから青葉会にもフアンの多い芳賀徹東大名誉教授（比較文学者）が草田男の句を好んでおり、斎藤茂吉の短歌と共に「気力おとろえたときの滋養剤」と述べているのに驚きました。小生の書棚にたまたま目についた草田男句集の中に文庫本の帯の惹句「葉・芳賀徹」とあるのに惹かれ、独特で面白かつたので、葉掲載全14句を紹介します。恥ずかし乍ら本文（87頁精選428句）は瞥見したのみです。

夕桜城の石崖裾濃なる

鳴るや秋鋼鉄の書の蝶番（てまががひ）

ふるさとの春暁にある厠かな

そこにしづか蜥蜴の胸の早鐘は

ひた急ぐ犬に会ひけり木の芽道

玉菜の芯から微かな鶏鳴広漠たり

手の薔薇に蜂来れば我王の如し

黒雲から黒鮮かに初燕

蜻蛉行くうしろ姿の大きさよ

大暑の日の鴉真（ま）から寝に帰る

暮れの富士歌の茂吉に会ひに行く

蛆一つ轢かれぬ渺たり渺たりな

茂吉歎談手啓（ひき）き炭火見下ろして

折々己におどろく噴水時の中

中村草田男句集『炎熱』

横澤放川編（ふらんす堂2011/3/19刊 ¥1,200）

平成三十年九月十六日

以上 紀久男記